

【現代語訳 (7) 安政南海地震津波の部分】

嘉永七年（安政元年・一八五四）十一月五日七
つ時（午後四時）頃、突然土煙が吹いてきて、非
常に非常に大々地震が揺れ出し、大地をひっくり
返すかのように、家の壁や塀、屋根の瓦を飛ばし、
とても長い時間揺れていた。男女子供は広い所へ
寄り集まり、大地震の時には地割れが発生するも
のだと聞いていたので、板や畳などを敷いた。泣
き叫んでいる者の中には氏神様うじがみに祈る者や念仏を
唱える者もあり、皆々生きた心地がしなかった。

そうしたところへ、沖の方からすさまじい音で
「ドタンドタンドタン」
としばらく鳴り響いてきた。あれは雷の音だろうか、
又は海の裂ける音だろうかと怪しんだり、ひよっ
とすると話に聞く津波がやって来るのではとおの
のきながらも、地震（余震）の合間を見ては、そ
れぞれの家財を移動させていた。

そこへ、早くも沖の方から大津波がまるで山の
ように、音は何とも例えようもなく耳を貫き、勢
い込んで潮が満ちてきたので、皆々泣き叫びなが
ら、持っていた荷物を途中で投げ捨て、命の限り
逃げ走った。足の速い者は里村（現由良町里）へ

逃げ行き、遅い者は宇佐八幡神社の高みや東側の高み、宮山・北山などへ逃げ、命だけは助かり、危うく難を逃れた。

中でも横浜浦だけで、死人が男女合わせて一七人いた。家屋は約一〇〇軒あったところ、八〇軒余り流され、一七軒だけ残った。

この夜に大きな余震がまた一回、その次にも夜明けまで一四〜五回揺れた。津波は夜九つ時（二四時）頃まで七度来た。夕方のものが一番の大津波で、それから段々小さくなっていったように見えた。

一流失家屋 六四軒

残存家屋 二三軒

ただし、この内津波で大破したものもあり、元のとおりに残って別条のなかった家は一七軒である。

波の高さ

一 網代浦あじろ（現由良町網代）御制札場ごせいさつば（諸荷物水揚しよにもつみずあげ場）ば二丈四尺じょうしやく（約七・二m）

この時制札場隣の屋敷にビヤクシンの木があり、これにより高さが分かった。

一 横浜の低い所は波の高さ一丈五、六尺（約四・五〇四・八m）

同 御旅所おたびしよ付近は約六〇七尺（一・八〇二・一m）
同 弓場道いばどう付近は約三尺五〇六寸（一〇五〇八cm）

御宮近辺は約三尺（九〇cm）、石段の六段目まで波が来た。馬場筋東出の一番高い所は約一尺三〇四寸（三九〇四二cm）〇二尺（六〇cm）
網代浦は一〇〇軒足らずだったところ、大体流された。

残った家は約一〇軒。ただし、西は小口の六軒（ただし四人流死）、山際の四軒ほど。

念興寺ねんこうじは残る。ただし、敷地に波が少し入る。

阿戸あと（現由良町阿戸）の浜側三〇軒ほどが流された。ただし、五人流死。

このうち、新造・瓦葺かわらぶきの家は残る。丈夫な家は残る。

一 江駒浦えのこま（現由良町江ノ駒）は浜の家が少し流されたが、瓦葺き・丈夫な家は残った。

一 吹井浦ふけい（現由良町吹井）は、浜の家が四軒流された。

そのほかの近村の海辺は別条なかった。